

降誕後第1主日

2010/12/26

聖ヨハネによる福音書第1章1節-18節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

クリスマス・シーズンには、ヨハネ福音書の最初の箇所、序言の部分を何度か繰り返し読んで読みます。今日の福音書として選ばれている箇所です。この箇所は、一部を除いては、原文では韻を踏んで書かれているということで、もともと初代教会に伝えられていた賛歌をもとにして書かれたのであろうと推測されています。「言(ことば)」と訳されている単語が何度か繰り返し出てきますが、もともとは「ロゴス」という単語です。そこからこの賛歌は、「ロゴス賛歌」と呼ばれています。クリスマスの賛美歌です。それを土台として、ヨハネ福音書を書いた人が加筆をして、この序言は構成されたと考えられています。

この「ロゴス」をどのように訳したら良いか、わたしたちの場合は日本語にということですが、これは専門家の間ではとても頭を悩ます重要な問題のようです。「ロゴス」という言葉には、定義とか理性とか評価とか論理など、いろいろな訳せる意味が含まれているようです。英語のロジック、論理とか議論の筋道を指す言葉ですが、これはロゴスから派生しています。神学をセオロジー言いますが、神さまを意味するセオスとロゴスがくっついてセオロジーとなりました。

しかし、この言葉が指し示しているのは、具体的な一人物、一人の人格、イエスさまのことです。ギュッツラフという人が日本語に訳した最も古い聖書が1837年に出版されていますが、その訳では、「ハジマリニカシコイモゴザル」と訳されました。苦心の訳です。ロゴスを「カシコイモノ」と訳しています。それがイエスさまです。

「カシコイモノ」という訳から連想できるのは、知恵です。旧約聖書続編には、「知恵の書」という文書がありますが、そこには、「知恵はあなたと共にいて御業を知り、世界をお造りになったとき、そこにいました」(9:9)というソロモンの祈りの言葉が伝えられています。また、同じくシラ書の中では知恵が自分自身をほめたたえた賛歌がありますが、そこでは「この世が始まる前にわたしは造られた、わたしは永遠に存続する」と歌われています。この「わたし」は知恵を指しています。

ヨハネ福音書の「言」「カシコイモノ」は、天地が創造される以前から父なる神さまと共におられ、同じ神として永遠から存在し、創造のみ業にあずかり、時が満ちて肉となって人々の間で生活し働きを続けられたのです(『聖書を読む ヨハネによる福音書』)。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた。」今日の福音書の1節です。

ところで、「言は肉となった」という表現、これは神の独り子イエスさまが人間とされたということですが、それを「受肉」、肉を受けると書いて受肉と呼びます。この表現からどのような印象を受けるでしょうか。わたしはどのような理由か、自分でもよく分からないのですが、「言は肉となった」という時の肉体のイメージは、スポーツ選手のような力強い肉体を、ずっと思い描いていて来たように思います。鋼のような肉体という形容がありますが、堅さと強さと柔軟性を兼ね備えた立派な肉

体、男性的な若い体を思い浮かべていたのではないかと思います。それはイエスさまが男子として生まれ、33歳で死を遂げられたことから来るのかも知れません。

わたしたちも若い内は、強靱とはいかないまでも多少のことではへたばることのない肉体を誇っていた時期があったのではないかと思います。肉体を酷使して疲れ果てても、一晚寝れば回復して、翌日はまた元気を取り戻して仕事ができる。若い頃は、それが当たり前だと思い込んでいたのではないのでしょうか。

それが歳を重ねてきて、段々無理が利かなくなってくる。老眼鏡がなければ新聞も読めないし、人の話も小さな声では何度も聞き返さなければならぬ。僅かな段差にもけつまずく。エレベーターやエスカレータをついつい頼りにしてしまう。人生の先輩たちを前にして言うのもおかしいかも知れませんが、そんな肉体の衰えに我ながら歳を感じざるを得ないわけです。

そればかりではありません。頻繁に病院通いをしなければ、今の健康状態を維持できない。薬を毎日、何錠も飲まなければたちまち血圧は上がり、血液はどろどろになり、持病が再発してしまうのです。

「言は肉となった」というヨハネの言葉は、肉体美を誇れるような体のことばかりではなくて、このような弱く、不自由で、思いのままにならない肉体をイエスさまはおとりになったと告げているのです。そのことに気がつく、ヨハネが言おうとしている事柄が、新たな光のもとに理解できるように思えるのです。若い時の肉体ばかりではない。わたしたち老いを感じる者と同じ肉体も、神さまの言が留まるどころです。苦痛に顔をゆがめ、何時かはその活動が止まって動かなくなる肉体です。その肉体をご自分のものとして引き受けられたのです。

前にもご紹介したことがあります。遠藤周作がフランスのマチルド・ロワという11歳で病気のため亡くなった女の子の詩を訳しています。「友だち」という詩です。

「わたしの咽喉が痛いとき

あの子の咽喉も痛み

わたしが夜 咳をする時

あの子も眼をさまして咳をする

わたしがママから叱られて泣く時

あの子も一緒に泣いている

夕陽にうつるわたしの影法師のように

あの子はいつもわたしと一緒にだ」(『聖書の中の女性たち』)

この詩の「あの子」はイエスさまを指しているのでしょうか。頑強な肉体ではなくて弱い肉体、滅んでいく肉体、弱さを持った人間そのものにイエスさまがなってくさった。そして影法師のようにいつも一緒にいて下さるのです。それ故に、イエスさまはヘブライ人への手紙が言っているように、「わたしたちの弱さに同情できない方ではない」のです(4:15)。

受肉の出来事は、イエスさまが老病生死のただ中に入ってきて痛み、苦しみをわたしたちと一緒に味わってくださり、そこで神さまの慈しみ示して栄光を輝かされた、正に恵みの出来事なのです。この弱い肉体こそが、神さまとの出会いの場となるのです(『キリスト入門 福音の再発見』)。それ故に、わたしたちは弱さを誇る事ができる。それがクリスマスのメッセージとして、告げられているのではない

でしょうか。主に感謝。